２８	お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
	安形　光子	女　性	８２歳	１７歳	富岡東部

①　８月１５日は，どこでどんなことをしていましたか。

私は名古屋駅の近くにあった日本陶器に勤めていました。その日は，ちょうど体調を悪くしていて，枇杷島の寄寄宿で寝ていました。

②　終戦のことを，どこで，どのように聞かれましたか。

寮の中で放送があって知りました。

③　敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

空襲が連日続いていたので，負けても不思議だとは思わなかった。内心ほっとしました。これで家に帰れるというのが正直な気持ちでした。

④　体験の中で，子どもたちに語り伝えておきたいこと

「軍需工場の寮が燃えた」

わたしは，旧鳳来町の名号で生まれました。高等科を卒業すると，名古屋の軍需工場から募集があると先生に言われ，友達３人といっしょに日本陶器に勤めることにしました。

軍需工場の仕事といっても，研削砥石を作る仕事でした。銃弾や砲弾をみがくための砥石を作るのです。私は希望して，旋盤の仕事をやらせてもらっていました。工場には軍人さんが入っていました。サーベルを持って，威嚇するように音を立てながら歩いていました。「今どき会社を休むような者は，軍刀のサビにする。」と言っていたことをよく覚えています。でも，海軍工廠のように軍需工場らしくはなかったです。陶器も普通に生産していましたし，工場が空襲に遭うこともありませんでした。。

昭和１９年の終わり頃から，名古屋はひんぱんに空襲されるようになり，寄宿舎もたびたび移動しました。工場に行くと，「〇〇さんが死んだよ。」という話をたびたび聞くようになりました。

大曽根の近くの上飯田にある寮にいた時のことです。民家のような建物で，１５，６人がいっしょでした。名号の４人がいっしょで，他は三重や岐阜の子

▲ **初の夜間 焼夷弾攻撃**　昭和 19.11.29　東京空襲

「昭和史　第八巻（研秀出版）より」

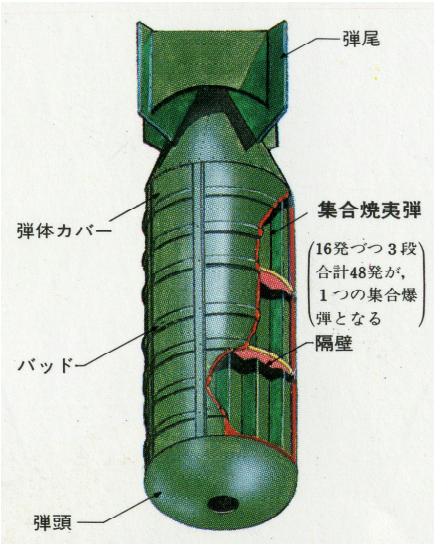
たちでした。空襲警報が毎日のように出され，そのたびに防空ずきんをかぶり，救急袋を持って，中村まで走って退避していました。それがだんだんめんどうに思えてきた頃です。寮の２階で寝ていました。「空襲警報発令」の放送がありました。「ああ，またか。」と思いながら寝ていると，寮母さんが，「何してるの！早く降りてきなさい。飛行機がきているよ。すぐ逃げなさい。」と涙ながらに叫ぶのです。私たちは，寝ぼけ眼で階段をかけ降りました。外に出ると，飛行機の音とサイレンの音がけたたましく聞こえます。急いで防空壕に飛び込みました。その防空壕は横堀で作ったもので，寮生全員が入れるほどの大きさでした。

しばらくして，爆撃の音が聞こえなくなったところで外に出てみました。何と，私たちが寝ていた寮は屋根が焼け落ち，火柱が立ち，まっ赤な炎に包まれていました。すぐ目の前には，焼夷弾が建物の中に突き刺さるように立っていて，そこから花火のように火柱が立っていました。すべてのものが燃えてしまいました。持ち出したのは，寝ぼけながら抱えてきた枕一つだけでした。あまりにあわてたものだから，訓練したこともすっかり忘れてしまっていました。

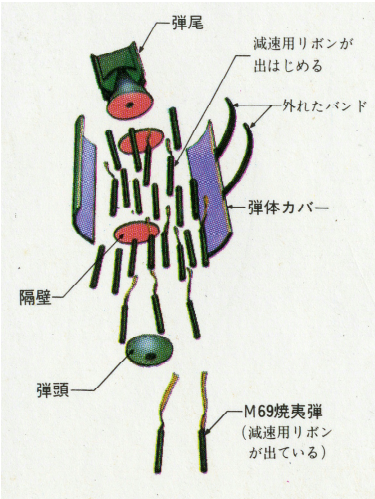
仕方なく，名号の家へ帰り，母親や祖母の古着などで着るものを作ってもらいました。若い娘なのに，年寄りのようなモンペと服になりました。でも，それがはずかしいとも，いやだとも思いませんでした。「ほしがりません，勝つまでは」が当たり前になっていたからです。

焼夷弾の仕組み

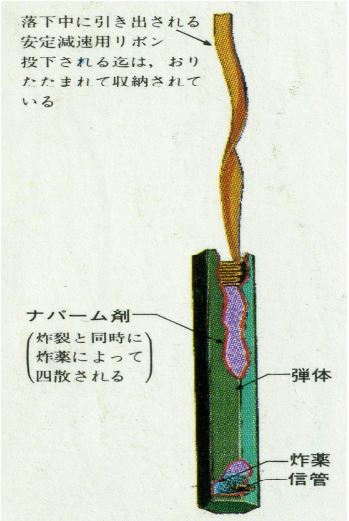
焼夷弾は，木造家屋の密集する日本の都市攻撃には最適だった。



集合焼夷弾は，中に４８発の焼夷弾が入っており，それが空中で開いてバラバラになって落下する。



焼夷弾は，落下地点だけでなく，周囲全体に中の油が飛び散る仕組みがありました。



「昭和史　第８巻
（研秀出版）より」